

池袋学事始

渡辺憲司

池袋学という言い方を初めて口にされたのは、立教大学元教授で日本近代史が専攻の林英夫先生である。豊島区郷土資料館学芸員の秋山伸一氏が、『生活と文化』第十七号（二〇〇八年三月）でそのことについて触れている。林先生の一文が絶筆であろうと述べた後、児童の村小学校をはじめ特徴ある学校が池袋およびその周辺に集中していたことを紹介し、そこから「池袋学」なるミクロの地域史の必要性を提唱したものであると記している。

私も学生時代、林先生の授業を聴講したことがある。先生の話は、厳しい戦後状況からの、平和教育の進展に対する強い思いがこめられている授業であった。

地方という言い方が、中央に対する従属的姿勢に流れることを危惧されて、地方という意味の江戸時代以来の自立的意味合いを話されていたことや、地域史という新たな姿勢を示されていたことも思い出す。

池袋学ではなく、豊島学といった言い方でもないのではないかとこの話も出た。確かにその方が地域的に広い範囲で考えることが出来る。しかし、私のきわめて個人的な言い方をすると、豊島学には、豊島という歴史の意味の広さや深い蓄積がある一方で、中央に対応するような旧来の地方史研究の残像を残しているように思う。現代史を扱うにはいささか研究の深度が、先を見えにくくするような気もした。

とにかく、まず第一歩としては、地元のことを知るといことが肝要ではないかという意見も出た。地元とは、まずコラボレーションを始めようと、タッグを組んだ、東京芸術劇場と立教大学の立地である。そして話し合われていくうちに、池袋の個性というものを浮き彫りにすることの面白さのアイデアが続々と出てきた。

池袋学は、もとよりここに住んでいる人や生まれた人のみを対象にしているものではない。つまり郷土史という言い方は相応しくない。

池袋を通過する人でもいい。池袋への旅人でもいい。池袋を愛する人のための学である。歴史学というよりも、現代に住む人からの目線を第一に考える視点を持ち続けたいと思う。

現代の雑多性こそ、池袋を支えるカルチャーである。

今や世界を牽引する日本のマンガ文化・アニメ文化の担い手である手塚治虫らがこの地で生まれた。池袋モンパルナスと呼ばれた若き芸術家の魂が躍動した。江戸川乱歩を中心とする大衆文化が胎動した。

まさに、日本のサブカルチャーの原点がここにあったのである。そしてサブカルチャーは、宿場町から発展した新宿とも、高級志向の銀座とも、門前町の浅草の庶民性とも異なる、郊外を背地とするターミナルの交差を背景に展開していったのである。

自立した文化風土と開放性を併せ持ち、もつとも住みたい町のひとつとしての評価も受けている。それはかつて、国際化の歴史が生んだ自由文化都市の息吹でもある。新たな自由文化都市池袋が生まれようとしている。

私たちは過去の歴史をしっかりと見極め、〈池袋学〉という土壌に鋤を入れたいと考えている。今回の論集はその第一歩である。御後援を願い又御叱正御指導を賜れば幸いである。

(わたなべけんじ 立教大学名誉教授、立教新座中学校・高等学校校長、「池袋学」座長)